万葉の歌が語る「軽」の地

2025.2.　太田蓉子

古代「軽かる」と呼ばれた地は、大和盆地の南部・橿原市石川町、大軽町、五条町及び見瀬町と久米町の一部を含む地域の呼称であった。（5頁に、Mapion 地図より作成の図）
「日本書紀」における記述では、「軽」については、
「応神天皇記」に、「軽池」「剣池」を造った記事、百済王からもらった馬を「軽の坂の上」・「軽坂」の厩うまやで飼ったのでそこを「厩坂うまやさか」と言う、記事がある。
「雄略天皇記」には、養鳥とりかい人を「軽村」に住まわせた記事が見える。（5 世紀後期）
飛鳥時代・6 世紀初期～7 世紀、蘇我氏が大臣おほまへつきみに就いた時期には、
軽の南部（五条野町）に、丸山古墳（欽明天皇陵）が、飛鳥・檜前（檜隈）ひのくまの地に接して造られ、また、推古天皇初葬の陵（植山古墳）も、同地に築造される。
「推古天皇記」には、母を父・欽明天皇の陵に合葬する時、「軽の術みち」が見える。
ここから、北へ向かう道筋のことと見え、さらに北へと向かう「下ツ道」の整備が始まったと見られる。
この後に詠まれた「万葉の歌」には、「軽の地」を詠んだ歌が 5 首あります。
「歌」を基に、詠まれた当時の状況を推測し、想像することにより、古代の「軽」の地がより一層鮮明に見えて来るのではないかと考えました。

〇「剣池つるぎいけ」の歌

古くから伝えられた大和圏の長歌謡を集めた巻十三、その「相聞」にある歌。
「宮廷長歌謡集」（記紀歌謡など）のようなものから整えられた歌と見られている。

「御佩刀みはかしを　剣の池の　蓮葉はちすばに　溜たまれる水の　行くへなみ
　我がするときに　逢ぁふべしと　逢ひたる君を　な寝ぃねそと　母聞こせども
　我が心　清隅きよすみの池の　池の底　我は忘れじ　直ただに逢ふまでに」
（巻13・3289番）

（貴人が腰に帯びる刀、その剣の池の蓮の葉に溜まっている水がどちらにも行けない様に、私が途方に暮れている時に、逢うべき定めの人と決心して逢った人なのに、一緒に寝てはいけないと母は言うけれど、私の心は清隅の池のように澄んでおり、清らかな池の底のように心の底から慕い忘れることはない、もう一度直に逢うその日まで。）

「剣池」は、軽の北部・石川地区にあり、古墳の森（中山塚古墳群、未発掘 5、6世紀頃と見られている）と一体となった灌漑池。（幕末に、孝元天皇陵に比定）
この歌が謡われた時期を、推察すると
舒明天皇 7 年に、皇極天皇3年（644 年）にも、“剣池に蓮の花が一つの茎から二つ咲いた”とある。それを、時の“大臣・蘇我蝦夷が、蘇我氏が栄える前兆だと喜んだ”と言う。事実この時、剣池の近くには、祖父と父・蘇我稲目と馬子の代に造った邸宅と、

仏殿（敏達天皇期・584 年、後「石川の精舎」と呼ぶ）が建っている。また、この地区に、
舒明天皇は、晩年（640 年）厩坂宮を造っている。　（以上「日本書紀」より）
軽の北部・石川は、蘇我氏の全盛時代における一大拠点と言えるところでした。
「歌」はこの時期に謡われたと思われます。
“娘子の純真な恋心”を、“剣池の清らかさ”に譬えて詠っています。
見晴らしの良い小高い処にあって、“清らかな水を湛え、蓮の葉が岸辺を飾る”
剣池の堤は、軽に住まう人々にとって心洗われる場所であったと、想像されます。

やがて、乙巳の変（645年）により蘇我氏本家は滅亡する。都は難波宮に移り、その後飛鳥宮に戻るも、直ぐに近江大津宮へ遷都する。その後、天智天皇の崩御の後の壬申の乱を経て、飛鳥浄御原宮にて天武天皇が即位する（673年）。
そして、再び、軽の地に活気が戻る。
藤原氏の氏寺が、山階やましな寺から軽の厩坂に移される。（厩坂寺）
この南（大軽町）にあった軽寺（遣唐留学生が持ち帰った仏像を安置していた寺）が、食封100 戸を賜る大寺院に拡張される。やがて造営が始まる藤原京では、軽の地は、その南京極の中心部にあたり、京の玄関口とも言える地となっていく。
次の2首は、この時期の歌
〇紀皇女きのひめみこ（天武天皇の皇女）の歌
「軽の池の　浦み行き廻みる　鴨かもすらに　玉藻の上に　ひとり寝なくに」
（巻3・390番 「譬喩歌」の冒頭に）
（軽の池の岸辺を行きめぐる鴨でさえ、玉藻の上に独りで寝はしないのに。）
「軽の池」については、
剣池の南西すぐのところに「大軽池」と呼ぶ小さい溜め池があるが、やはり、軽の地で最も大きい池であり古墳の濠と一体となった「剣池」のことと見られる。
（「鴨」が詠まれているが、渡りをしない留鳥である「カルガモ（カモ科マガモ属）」の名称は、このカモが、軽の池々に多く繁殖していたことに由ると言う。）
紀皇女は、軽皇子（後の文武天皇）の妃ひとなったが、異母兄の弓削皇子と密通し、そのため妃の身分を廃されたとの説もある。（紀皇女を思う弓削皇子の歌がある。
巻2・119－122 番）
天武天皇には、分かっているだけでも皇子が10人、皇女が7人いる。（天智天皇には16人の子女）彼らの居宅が何処に在ったのか殆ど分かっていないが、飛鳥宮の近辺にあった筈である。早い時期から開拓が進み、河内・難波への道にも近い軽の地は、皇族や貴族官人が邸宅を構え、そこに従事する人々の住居を置く、その立地にかなっていたと思われます。

〇柿本人麻呂の「泣血哀慟きふけつあいどう歌」（妻死にし後に、泣血哀慟して作る歌）

藤原京・文武天皇 4～5年（700～701年）頃の作と見られる。
軽に住んでいた人麻呂の妻は、女官であったとも見られている。
（持統天皇の伊勢国行幸の時の人麻呂の歌などから。）

「天あま飛ぶや　軽かるの道は　我妹子わぎもこが　里にしあれば、、、、、、
我妹子が　やまず出で見し　軽の市に　我が立ち聞けば　玉たすき　畝傍の山に
鳴く鳥の　声も聞こえず　玉鉾の　道行く人も　ひとりだに　似てし行かねば、、
、、、、　」（巻2・207「挽歌」）

（天飛ぶ軽の巷は、我が愛しい妻のいる里だ、、、、）
｛通って行きたいと思いつつ今は控えていようと恋慕っていたところ、使い者が来て妻が逝ってしまったと言う。あまりの報せに、どう言ってよいかどうしたらよいか分からず、この気持ちが千に一つでも紛れるかと、｝と続き、
（我妹子がしょっちゅう出て見た軽の市に出掛けて行ってじっと耳を澄ましても、あの子の声はおろか畝傍山にいつも鳴いている鳥の声さえも聞こえない。
道行く人も一人としてあの子に似た者はいないので、、、）　そして、結句は、
｛どうしてよいかわからず、ただひたすらに妻の名を呼んで袖を振り続けた。｝

「歌」にあるように、妻の家が軽にあり、“妻がしょっちゅう見に出た「軽の市」”が立つ此処は、各地からやって来た人々が行き交う繁華なところであったと分かります。
中でも、下ツ道と山田道（飛鳥の北部を通り山田寺の方へ）の交差点（巷ちまた）は、
厩坂寺の丈六仏にちなんで「丈六」と呼ばれ、軽の中心地点であったのです。
（山田寺は、開基は蘇我倉山田石川麻呂、643 年頃であるが、天武期に完成）
「軽市」に百官が揃い、騎馬隊が練り歩いたことも見られます。（天武期10年）
また、「天飛ぶ」を、「軽」に掛ける枕詞としています。
“空飛ぶ”意から「鳥」に掛けるのを、“空飛ぶ雁や鴨”から「軽」に掛けています。
軽の地に川は無く、古墳の濠だけでなく灌漑池を幾つも造っている。傍に森もあるので、鳥類が棲息しやすい環境であったと思われます。
（“木梨軽皇子と軽大娘皇女の恋”の記紀歌謡にも、「天飛ぶ　軽の嬢子おとめ」と歌われている。（5 世紀・允恭天皇の皇子と皇女、軽に居住か）　記紀歌謡は、人麻呂と同時期に整えられたとも見られているが、この歌謡から引用した枕詞かも知れない。）

次の 2 首は、平城遷都（710 年）以後の歌

○「軽の社」の歌　作者不明
「古今相聞往来歌類」の「今」にあたる歌。奈良時代初期の歌と見られている。
「天あま飛ぶや　軽かるの社やしろの　斎いはひ槻つき
幾代いくよまであらむ　隠妻こもりつまそも」
（巻11・2656番　寄物陳思・神祇部）

（空飛ぶ雁ではないが、軽の社の神木の槻の木がいつの世までも在るように、私は、一体いつまで　隠妻（世間に知られていない妻）でいるのでしょうか。）

「軽の社」について、

軽の地には、小高い丘と森があちこちにあり、蘇我氏による開拓が進む頃には、森には神の社が幾つかあった。中でも、剣池の直ぐ傍にある「石川の社」は、飛鳥宮へ向かう大野の丘の森・西端にあり、石川地区は、軽の要地でもある。

（大野の丘の北部にも、蘇我馬子は仏塔を建てるが、ここは物部守屋に焼かれた。）

石川の社は、律令期には大歳神社（農耕の神）として官社（式内小社）に指定されている。

「歌」は、大歳神社の静かな森、槻木つきのき・ケヤキの大木に、鳥が止まって鳴いている声だけが聞こえる。そこへ、隠妻となっている女が独り、ふらりと神参りにやって来て、詠んだ。そんな想像が出来ます。

また、歌の作者は、実は、隠妻の夫で、律令官人。遷都により、自身は奈良に住居を移したので、軽に留まっている妻には益々逢い難くなった。そんな状況にある妻の思いを「歌」にした、とも想像できます。

実際に此の時期、軽の地には、同じ様な境遇の女たちが何人も居たと思われます。

〇笠金村かさのかなむらの歌

聖武天皇の紀伊国への行幸の時（神亀元年 724 年）、従駕じゅうがの人に贈るためにと、ある娘子に頼まれて作った歌　と言う。

「大君の　行幸みゆきのまにま　もののふの　八十やそ伴ともの男をと
出で行きし　愛うるわし夫つまは　天飛ぶや　軽の路みちより　玉たすき　畝傍を見つつ
あさもよし　紀伊道きいじに入り立ち、、、、、」

（巻4・543番「相聞」）

（天皇の行幸に従って数多くの大宮人たちと一緒に出掛けて行ったひときわ端正な私の夫は、軽の道から畝傍山を見ながら紀伊の道に足を踏み入れ、、、）

｛私の事など思わずに、旅はいいものだと思っているとは気づいているけれど、夫が行った道筋をたどって追って行きたいと思うけれど、紀伊の関所の役人に尋ねられたら何と答えたらいいのか分からないので、立すくんでしまう。｝と続く。

笠金村は、聖武朝において、一番人気の宮廷歌人です。紀伊国のほか吉野、難波、播磨など天皇の行幸には常に従い、歌を詠んでいます。

この歌も、従駕の人々のための旅先の宴会で、労をねぎらい留守居の妻を思い出して気分を和ませようと、詠まれた歌。　金村作の「歌物語」とも言えるものです。

平城京の朱雀大路を出て、先ず、下ツ道を南に向かうその南端部が軽の道であり

右手（西方）に畝傍山が見えて来ます。
「軽の道」と聞けば、宴席の誰もが、かって人麻呂が詠んだ「泣血哀慟歌」を思い浮かべ、“軽の里と人麻呂の妻“を偲んでくれるようにと、「天飛ぶや」、「玉たすき」の枕詞も、そのまま用いて詠います。
軽の地が、今や“思い浮かべる地”となっているとも見えます。
「政治と経済の要衝」であった「軽の地」が、京みやこから南へ向かう“旅の通過地点”に過ぎなくなったことも、「歌」は、暗示しています。
遷都に伴い、国政に関わる人々と共に多数の人口移動が始まります。
藤原氏の氏寺・厩坂寺は、平城京に移築され興福寺（官寺に）となり、軽寺は残るが縮小され、後には興福寺の末寺となります。
「軽」の地は、小高い丘々に小さな社が座するだけの、のどかな田園風景が広がる土地に変貌したと想像されます。

主な参考文献　・宇治谷孟「日本書紀」全現代語訳（講談社学術文庫）及び「原文」
・伊藤博 「萬葉集・釋注」 集英社
・佐藤信　編 「古代史講義」ちくま新書　・吉川弘文館「日本史年表」
・「橿原市埋蔵文化財遺跡調査概要」 奈良文化財研究所、 他